史料紹介　松江藩における長州戦争史料（1）

岡　宏三

元治元年（一八六四）、禁門の変を受けて発せられた長州征討令（第一次長州戦争）と、慶応二年（一八六六）に交戦が行われた第二次長州戦争は、島根の諸地域に動揺をもたらし、その後の社会変革に決定的な影響を与えた。

長州藩に隣接し、かねてから多方面で交流があり、立場上は幕府側にありながらも、恭順の意を示す長州を征討する大義はないとして避戦を主張した津和野藩は、維新後は亀井茲監が神祇事務局判事、福羽美静が同権判事となって新政府の宗教政策に多大な影響を与えるに至ったのに対し、水戸藩の徳川斉昭の十男・武聡を藩主に迎えていた越智松平家の浜田藩は、石州口の要の立場として長州藩と交戦せざるを得ず、最終的には浜田城自焼、天領の大森銀山領とともに長州藩に占領され、飛地であった美作国の鶴田領に移転を余儀なくされた。

また浜田藩とともに幕府側として戦闘・物資輸送にあたった、越前松平家の松江藩及び同藩の支藩である広瀬・母里藩は、石州口の敗戦により石見が長州軍に占領された結果直接境界を接する形となり、長期にわたって対峙せざるを得ない状況に追い込まれた。鳥羽伏見の合戦直後には、西園寺公望率いる山陰道鎮撫使から出雲半領の返上、重役の切腹などの要求を突きつけられた上に、最終的には奥州出兵、一〇万両に及ぶ献金を余儀なくされた。この間、隠岐では島民が朝廷直轄を主張して松江藩の郡代を追放、一時的に自治支配を行った（隠岐騒動）が、その後松江藩、鳥取藩、大森県、鳥取県、島根県へと管轄がめまぐるしく変転した。

このように島根県域では、長州戦争とは、島根県域が近代に移行する過程においてターニングポイントとなった大事件であったにも関わらず、従来まとまった研究はほとんどなされてこなかった。また先行研究においても、研究の視点は長州と諸藩の戦闘の経過に置かれ、争乱に伴って領民に対して如何なる負担が課せられたのか、また戦争下における領民の動向についてはほとんど着目されることはなかった。

稿者は先に石見における地域住民の動向を詳述する史料として、津和野藩領であった邑智郡木田村の大庄屋・佐々田氏の「長征石見戦争聞書」を当紀要一五号に翻刻掲載し、実は長州への住民の期待は戦争当初から高く、幕府に対しては批判的であったこと、長州占領下では、浜田藩札が反故同然となるなど経済が破綻状態となったことから、農民側と長州藩兵との間で衝突が勃発したことなどを明らかにした。

「長州御征伐被仰出取扱一途」は、楯縫郡猪目村の旧家・飯島家から一括寄贈された文書群の内、第一次長州戦争に関わる史料の一つである。同家の長州関係史料は、第一次戦争に伴う農兵の編成、出兵に伴う松江堂形町への集結、第二次戦争での幕府側敗退に伴う領内の混乱、北前船等を通じた上方筋・西国筋の戦況情報の収集、鳥取藩兵の出雲西部駐屯と手結浦の詫間樊六事件、戦争末期の松江藩長州藩間の休戦交渉等についての情報等詳細を極め、支配される側が如何に情勢を細かく把握していたかを窺い知ることが出来る一級資料である。当時の当主飯島与九郎は、楯縫郡の与頭を勤め、藩と郡下村々との間にあって郡治を管掌調整する立場にあったから、本史料は楯縫郡役所に達せられた書類から特に本件に関するものを抽出して一括書写したものと推定される。そのため本史料からは長州戦争に伴い藩が令達した領民に対する指示、賦課の具体的内容、及びそれに対する郡役所の対応の様相、領民の反応が詳細に知られるが、大部に亘るため三度に分けて紹介する。

本史料から知られる松江藩の領民に対する賦課は、第一に農兵の編成であった。従来その具体的構成も兵役の内容も明らかではなかったが、松江藩の農兵は各郡の

人口の規模に応じて徴発されたものであったこと、出兵にあたっては脇差を帯びることを認め、調練も行われていたものの、本格的な操練は藩士に限られ、かつ農繁期には調練を中止されるなど、名目は歩兵でありながら実質は郷夫であり、臨時的労役に留まったことが判明する。また物資的賦課も、軍馬用の飼葉、調練用の竹木類が主なるものであり、軍用金等の徴収が行われていないことも注目される。すなわち藩当局は領民に極力負担を掛けないよう努めたことが窺われるのである。このように、従来のような藩庁記録等からのみならず、領民側の史料等を通じて、戦争の推移とその社会に及ぼした影響を多角的に分析することが必要なのである。

・仮名遣いは原文通りとしたが、適宜読点を付し、旧字体は新字に改めた。また異体字・合字はできるだけ残すこととした。
・見セケチ、抹消部分は、当該文字の上に抹消線を引くことで表した。塗抹により判読出来ない箇所は■、抹消されていないが判読困難な文字や、破損・虫損箇所は□で表し、虫損等が著しい場合は［　］であらわした。
・文章上誤りと思われる文字の傍らには（ママ）を付した。
・割註は原則として［　］で当該部分を括った。なお【　】内に文字のあるものは、出雲市東林木町園山家旧蔵文書により補った。

元治元子十月
長州御征伐被仰出取扱一途　　与頭与九郎

殿様去ル廿一日、京都　御発駕、来月三日　御帰城可被遊旨ニ候条、為知申入候、以上

二月廿六日　　渡部文六

下郡徳三郎殿
与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿

此度、従公儀御触達有之候浪人殿り合之儀、板札ニ認メ、高札場或者村役人宅、寄場抔江当分懸置候様被仰渡、正月十六日相触置候処、板札ハ郡ニ而相認メ、一村限り厳重ニ懸置候様可取計候、且又高札場江懸置候分者上ゟ御渡被成遣旨ニ候条、追而受取可相渡候、已上

二月十八日　　渡部文六

下郡徳三郎殿
与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿

殿様去ル廿一日、京都被　遊御発駕、来月三日　御城着可被　遊旨御議定被仰出候由為御知有之候条、為知申入候、以上

二月廿七日　　渡部文六

下郡徳三郎殿
与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿

為御上京何時　御発駕可被　遊も難斗、御差閊無之候様可令覚悟旨被仰渡候ニ付而、去ル七日委細申談置候処、此度当春

御上京ニ付、郡雇御小人共追々被帰、一旦差返置候得共、御発駕御日取被仰出候得者右之人数早急操出し候様、万一急場之節ハ、遠路も有之、別而御差問不相成候様可申談置旨ニ候条、此段令承知、右人別江も為知置、若病気故障等ニ而難罷出旨断出候分ハ、早々代り人相撰置、御日取次第直ニ繰出し候様可取斗候、以上

三月十二日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

覚

苅豆五千四百六拾弐貫弐百六十匁

右子所務御厩御入用苅豆、五万三千貫目、仁多、飯石両郡除外、八郡江令割賦、其郡之分如此ニ候条、無間違作立、令払方候様可申付候、以上

三月十日　　渡部文六

郡三人当テ

長州家老胴（ママ）勢三四拾人ニ而石州御通行大社参詣、夫ゟ因州江罷通り候風聞ニ付、取扱方相伺候処、右者弥罷通り候と申ニ相成候ハヽ、任先触人馬継立、休泊所等之儀共万□、不敬之儀無之様、尤杵築参詣ゟ御城下泊ニ罷出□程も難斗候ヘハ、口屋御番所又者駅々ニ而、北路ハ人馬差問有之、其上難所多分趣を以程能相断、南路相通し、往来者改を郡切付添、□屋共其後ゟ遠見ニ付置、且人馬之儀ハ相対賃銭、旅籠者所相当受取、賄用意等随分叮嚀ニいたし、止宿之ヶ所へ者往来者改、郡役人も相詰、万々越度無之様取斗、若不審之儀等有之候ハヽ内々届出候様南路郡々江申談置候得共、万一不得止北路通行候様之儀も難斗、其節ハ右之趣を以万々越度無之様可取斗候、以上

四月廿六日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

農兵御取立ニ付、諸郡共張込稽古為致候処、此節農事開敷折柄、植付等手後れ相成□（候）而者不宜、仍相済候迄ハ諸郡共稽古為見合候間、いつれも作方ニ尽精力、手返し能相仕舞、其段早々可申出候

右之通り被仰渡候条、御書付之趣得其意可申渡候、尤右ニ付気配之折（妨）ヶニ相成候訳ハ有之間敷候得共、尚又右等之処、其方共ゟ申諭可置候、已上

五月七日　　渡部文六

郡三人当テ

万田村勝右衛門居家売払候ニ付、御陣屋ニ相成候而者如何哉之旨伺出候ニ付、先達而一通り見分も有之候処、口宇賀村ゟ大分奥入ニ而弁理不宜場所柄之様相見へ候由、畢竟農兵取立方并台場詰之仁□一ヶ所江都詰被置候様相成度訳と相聞候処、右之外相当之場所共者無之哉之否、急々可申出候、以上

六月朔日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭与九郎殿

農兵共植付時分ニ付、相済候迄稽古見合候様先達而被仰渡候処、平田町ゟ出兵罷在候人別共、農兵一□ニ付、不絶稽古御教示被下度委曲伺出候趣申達候処、御聞届之旨ニ候条、此段可申渡候、以上

六月五日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

当節軍馬御手当用要用之折柄ニ付、乗馬ニ可相成分他国へ売払度ものハ伺出、差図を受、可取斗旨、間近く被仰渡も有之、尚又他国□馬牽入候儀も前々ゟ停止ニ候処、間ニハ心得違之族も有之、近来追々不□(正)之取斗致候ものも有之趣、以の外之事ニ候、元来御国駒之儀者、

公儀江御献上、且　御召馬等大切之御手当ニ付、父馬抔上ゟ被差出、種々御手入□有之儀者馬持共悉く承知可罷在候事ニ候得共、仮初ニも心得違之儀者致間敷之処、右之次第不埒之事ニ候、仍向後相背候ものハ、重キ咎可被仰付旨ニ候条、いつれも致会得、猥之儀無之様、尤愚昧之もの共一応二応申渡候迄ニ而不差置、不絶申諭し、御制度幾重ニも押貫候様取斗、其上心得違之者有之候ハヽ、早々取糺し可訴出候、万一等閑之儀有之ニおゐてハ、其方共も越度不遁筋ニ候条、聊も油断無之様可令心配候、以上

六月十五日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

追啓、馬口労殿り合之儀、先達而及□□(差出)候処、右者先日是迄之通り被差置候条、為知申入候、以上

浦方ゟ長崎江交易ニ罷出候もの共ハ有之哉、内々及手当否、急々可申出候、以上

六月七日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

隠州嶋前詰御武具方御役人曽田文七御貸人、病気代り壱人御入用ニ候処、近々御用便を以渡海被□□、其郡へ令割賦候条、例之通り相撰、早□□(々致)出府候様可申付候、以上

六月廿一日　　渡部文六

郡三人当テ

歩兵共江了簡銭之儀追々願出候ニ付申達候処、歩兵共ハ御賄之□□□世帯道具迄も御渡被遣□□(問ス)、先達而御取替御了簡金等も被遣、当節御操出□之央、際限も無之ニ付、此度ハ上ゟ之御仕向者無之候間、御小人上給銭之見斗を以、壱人へ五拾貫文ッ、此度切郡ゟ相渡被遣旨ニ候条、此段令承知、可取斗候、以上

六月廿九日　　渡部文六

郡三人当テ

覚

割木壱万八千貫目

右、薪方ゟ近来他国薪船致入津兼候ニ付、追々払底ニ相成、御家中御差問之趣、仍槙・雑木・松木之内、何等ニ不限拾万貫目御入用ニ付、格合之通八郡へ令割賦、其郡割賦前々書之通ニ候条、格合次第早々附来候様可令手配候、以上

五月廿六日　　渡部文六

郡三人当テ

近年他国商人共口屋御番所ニ而反物上品之分等、御国通抜荷物之楯ニメ、郷方□場なとへ取入、宿主へ口銭遣シ、忍々売捌、又ハ木綿商人、船持之者共他国ゟ唐木綿抔取帰り、尚小間物座方之者共之内、直仕入等いたし、其外無座ニ而小間物類荷ひ売いたし候者とも数多有之趣相聞、不埒至極之事ニ候、仍而急度相糺し可申談旨ニ候得共、先此度之儀者其儀ニ不及候、右者畢竟其方共制度等閑故右之次第ニ候、仍以来右様之儀無之様可令精勤候、尚往来者改ハ別而心を付相探、若此後右様之聞ひ有之者者取糺し、可申出候、以上

六月廿二日　　渡部文六

往来者改
郡三人　当テ

此度隠州渡海之諸士へ御貸人惣御入用八拾弐人之内、本人手人代り拾六人御渡被遣候分ハ給米拾三表宛相弁候筈ニ付、其余不足之処ハ、一日弐百五拾文宛ニ相当り候様親懸り之面々御貸人賃銭之通り郷町割を以償ひ可遣旨御議定之旨ニ候、尤給米等之差引ハ帰□之上同所ニ而取都詰、及通達候由ニ付、委細其節可申入候条、左様可相心得候、已上

七月六日　　渡部文六

郡三人宛

農兵世話役之面々出郷之節、御用馬御渡被成遣旨、尤多人数伴候節ハ駅々差閊候儀も難斗旨、左様之折者其所ニ馬有合候丈ケニ而相仕舞候様農兵世話役共へ被仰渡、且馬具も銘々持出候御議定ニ候条、此段令承知、□□□へも為知可置候、以上

七月六日　　渡部文六

郡三人当テ

覚

米弐千弐百七拾三表

内

四百表　　八月朔日切
五百表　　同十日切
七百表　　同廿日切
六百七拾三表　九月朔日切

〆

林大四郎
元〆頭取
佐藤官蔵

右、楯縫郡子納早米割賦ニ候条、日限之通可取立置候、追而払方可申入候、以上

子七月十九日　　三嶋泰八郎
原与三兵衛

御代官所
下郡徳三郎殿

先月廿七日御議定ニ相成候農兵、十七才以上之もの江増賃米五合宛初発之所ゟ相渡遣し度旨、此度神門郡ゟ伺出、申達し候処、御定メ之弁当料ニ者難取行候段、伺出候ハ当三月之事ニ候間諸郡共同様、同月ゟ増賃遣し候様可申談旨ニ候条、此段令承知可取斗候、以上

七月廿日　　渡部文六

郡三人当テ

覚

一、米弐千弐百七拾三表

内

四百表　八月朔日切
五百表　同十日切
七百表　同廿日切
六百七拾三表　九月朔日切

右之通早米御急手ニ付割賦被仰付候条、日限無遅滞相納候様可申付候、以上

七月十九日　渡部文六

郡三人当テ

与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿

一筆致啓上候、残暑甚敷御座候所、弥御堅勝被成御勤役、珍重奉存候、然ハ歩兵共江為了簡銭五拾貫文宛郡ゟ相渡可遣旨被仰渡置候処、前以金子弐両宛手合相渡置候分、此度五拾貫文立用ニいたし可遣旨、歩兵共江申聞候所、諸郡ハ右立用ニ者不相成、五拾貫文者被仰渡候通り別段相渡呉候様申出候処、貴郡ハ如何御取扱被成候哉、此状達次第乍御面倒様子為御知被下候様奉待入候、此段御示合旁如此御座候、恐惶謹言

七月廿日　下郡源一郎

下郡徳三郎様

当節柄諸御普請御修復所等洩所抔者無拠候得共、其余ハ先ッ見合候外、諸伺事も不差急儀者追而御差図有之候迄見合可申旨ニ候条、右之心得を以可取斗候、已上

七月晦日　渡部文六

佐藤白蔵殿
下郡徳三郎殿

一筆致啓上候、当節不穏折柄ニ付米穀ハ不及申、味噌、梅干、漬物之類、他国ものニ被欺売渡候歟、又ハ御国者とも他国ものニ被頼買集、売渡候様之儀可有之茂難斗候間、右様之儀決而無之様急度人別ともへ御申付置可被成候、以上

七月晦日　野津武三
田中周助
渡部専十
渡部喜重

佐藤白蔵殿
下郡徳三郎殿
与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿

因州御領内産物、鉄、綿、木綿之類、当節柄ニ付下男相対ニ而他所売事取組之儀□ニ願出之上ニ無之而ハ一切不相成旨申渡候ニ付、御国内之者共兼而相対売買仕来居候ものも可有之候ニ付、申聞置候様、且又あの方産物之品入用之向も有之節ハ、其手役人ゟ懸合遣し候ハヽ、其品取調之上、否返答□□（御届）申越候条、以来相対取組之儀ハ決而致し不申様、尤もあの方産物入用之節者伺出候様郡中人別江不洩様申渡可置候、以上

八月朔日　渡部文六

郡三人当

諸郡一同急々申談候御用向有之候条、此状達次第其方儀役場江可罷出候、為其飛脚

を以申入候、以上

八月二日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

追加、若病気故障有之候ハヽ、与頭之内壱人令出府候様、右者急御用ニ候条、片時も急々可令出府候、以上

従京都御飛脚到来、去ル廿日、御所司代ら御留守居御呼出ニ付罷出候処、左之通御達し有之旨申来候

御　名

長州藩士等、頃日出願有之趣ニ候得とも、多人数兵器を携へ、所々屯集、甚不穏候ニ付、早々引払、福原越後ハ少人数ニ而伏見罷在、出願之儀者穏ニ経其筋、重而之御沙汰相待候様

朝廷御趣意を以説諭為致候得とも、悔悟不致、鎮静与相唱へ、国司信濃、益田右衛門介等引続罷登り、却而人数追々相増、再之願書差出、恐多くも去秋八月以後御所置も真之

叡慮ニ無之抔申上、兵威を仮り広而歎願罷在候条、奉劫

朝廷候所業、不届至極ニ付、所々屯集罷在候長藩之者征伐之儀、従

天朝被仰出候、就而者長防二国之動揺難斗候間、押へ之儀屹度相心得、以後罷登り候者ハ勿論、於国許も如何之所為有之者、速ニ人数差向け、誅伐可致候

但、時機見斗、主人々々出張口々ら可攻入事

七月廿六日

右之通従京都申来候由、為御承知有之候条、為知申入候、以上

七月廿六日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

原猪太郎殿

郡役人三人アテ

追加、本文之趣為知有之候得共、猥ニ人別気立候而ハ以之外之事ニ候条、人気動揺不致様ニ可令心配候、已上

別所武三郎二男竹之助儀、為早駆当月廿五日京都出立、只今参着、去ル廿四日御老中稲美濃守様ら御所へ御留守居御呼出し、西国御大名方類役一同

紫宸殿於御廻廊ニ美濃守様より御達書御渡被成候由ニ而、持参之御達書、左之通

御　名

松平大膳大夫儀、兼而禁入京之処、陪臣福原越後を以、以名ハ歎願ニ託し其実強訴、国司信濃、益田右衛門介等追々差出候処、以寛大仁恕雖扱之、更無悔悟之意、言を左右ニ寄せ、無容易意趣を含、既ニ自分兵端を開、対

禁闕発炮候条、其罪不軽、加之父子軍令条授、国司信濃全【令】軍謀顕然ニ候、旁防長ニ押寄せ、速ニ追討可有之事

七月廿三日

右之通従

御所被仰出候ニ付、御追討有之候間、速ニ軍勢国許へ相揃置、差図相待可被申候、尤従彼妄動いたし候ハヽ、不待差図口々ら撃入、誅滅可被致候

但、寄手之攻口并攻懸候日限者、御決定次第可相達事

七月廿九日

右之通被仰出候由為御知有之、早々為知置可申旨ニ候条、此段令承知、郡中江者郡役人とも為知可置候、已上

七月廿九日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

原猪太郎殿

郡三人当テ

今度被仰渡候条、万一異発之節、御入用郷夫、左之通

一、郷夫四千五百人

夫馬六百四疋代り

一、同　弐千四百拾六人

〆六千九百拾六人

此郡訳

千六百八拾人　神門郡
五百五人　飯石郡
八百九拾九人　意宇郡
三百四拾六人　能儀郡
五百弐拾六人　仁多郡
七百六拾壱人　大原郡
六百九拾弐人　嶋根郡
三百五拾九人　秋鹿郡
六百七拾八人　楯縫郡
四百七拾人　出雲郡

右之通割賦申付候、尤唐船番御重手御入用郷夫四千五百人兼而十郡江割賦申付、郡々ニ而手当テ罷在候筈ニ候得者、此度御入用ニ相用ひ、其余不足丈新タニ手配可申候、且又是迄も申談置候通り、村々ニ而達者なる者何拾人与御定、帳面ニ仕立置、操出之儀者任差図、村々ニ而竹貝ヲ以村役人ゟ為知ニおよひ候手配致し置、右為知ニおよひ候ハヽ人夫ニ罷出候もの共へ即刻食骨柳并蓑笠足装束取揃、庄屋所江相集候様申付置、尤食骨柳弐ツ為持、身蓋共ニ兵粮相詰遣し、心能く一日之食為持、集り次第一ヶ村切り何郡何村庄屋与相記候幟相立、直ニ庄屋儀人夫召連、松江江罷出、兼而定之通堂形江相集、其段受候与頭ゟハ、二丸北ノ惣門内ニ相詰候郡足軽江、何郡何村郷夫何拾人罷出候段相届可申事

一、与頭ハ郡奉行ゟ差図次第村々江及為知、其身ハ直くニ出府、二ノ丸北惣門内江罷出、同所ニ相詰候郡足軽江相届、尤何郡与頭与申幟相立可罷出候、扨又出夫受取渡し、夫々ニ而着到ニ相記、勿論添手配ハ下郡并ニ与頭ゟ可取扱事

一、郷夫弐拾人程宛一組にして、肝煎与して組親壱人宛相加へ、途中散乱不致様差急可罷出事

但、肝煎も割賦高之内与可相心得事

一、諸郡郷夫或ハ与頭、庄屋とも松江ニ而兵粮焼出ハ、白潟、末次両町湯屋共江兼而議定之通被仰付度旨申達置候条、左様可相心得事

右之通ニ候条得其意、品々及手配置、追而差図次第片時も急々操出し可申候、以上

八月二日　渡部文六

下郡徳三郎殿
与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿

急申進候、此度御操出し御手当として郡々村々人別とも江夫役被申付候由之処、御立山守之分ハ兼而諸役目差除来候故歟、意宇郡ニ而ハ此度之夫役をも相除候様相聞候処、其郡ニ而ハ如何取斗有之候哉、一応及御尋候間否、急々御申出可有之候、以上

八月十日　松浦辰三郎
岡　賢蔵

下郡徳三郎殿

御出陣ニ付自分出張之節、昼ハ幟、夜ハ挑燈、左之通御議定之旨ニ候条、此段令承知、村々へも為知置可申候、以上

八月十二日　　渡部文六

郡三人宛

地晒□幅長サ五尺

一、竹刀木出来之樫木、是迄御軍用方取扱ニ而、留木も有之候処、以来文武館ゟ御役人出郷、右留木ハ勿論、御用ニ相立候木ハ、御軍用方仕来候通ヲ以伐採いたし候間、此段相心得候様

右之通相心得可申旨ニ候条、此段令承知、村方へも為知可置候、以上

八月十二日　　渡部文六

郡三人宛

一筆致啓上候、当時勢付而ハ悪吉とも巧ニも可有之、御家中名前申立、所持之乗馬松江為牽出なと致し候趣相聞候□□、何等ニ不限如何様之謀斗ヲ以欺取候様之儀も難斗候間、人別共急度心得居、何ニても慥成証拠無之ものハ手放し不申様能々御諭置可被成旨ニ候間、早々人別へ不洩様御申付可被成候、以上

八月六日　　四人

三人宛

覚

十郡々役人

右其方共、異変之節御操出し一条ニ付而ハ、郷中諸手配夥事ニ候処、一同令一致、御用御差支不相成様尽粉骨可令取引覚悟ニ罷在候段、神妙之申出ニ付、申達候処、御当職方ニも御満足之由ニ候、仍厚可誉遣置候旨ニ候間、尚以可尽精力候

八月十日

右之通被仰渡候条、御書付之趣可得其意候、以上

子八月十日　　渡部文六

郡三人宛

異変之節、郡役人共御紋付高張挑燈取用候儀者不苦候、其外祭礼、会式之節取用候儀者可令用捨事

右之通被仰渡候条、御書付之趣可得其意候、以上

子八月八日　　渡部文六

村田幾右衛門

十郡下郡当テ

農兵取立方出郷先ゟ異変之節、台場へ罷越候節、人足ハ村役人江懸合次第相渡候様可申談旨ニ候条、此段令承知、早々申渡可置候、以上

八月十八日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

此度、

御出陣取調ニ付而、御入用ハ御宥用与不混様差引ニ取都詰、仕出し手形も前仕出し

□御議定之旨ニ候条、此段令承知、可取斗候、以上

八月九日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

農兵与頭御厩今村主殿病気ニ付被差免、為代羽山松二郎江被仰付候、主殿組子其侭松二郎組ニ相成候由候条、為知申入候、以上

八月八日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

一筆令啓達候、其郡平田町鍛冶良七、東郷村鍛冶嘉吉両人之者、御軍用御用ニ付此節出府罷在、御用相勤居候旨町村之人夫■（役ヵ）御差除可有□（之）候様町村役人江御談可有之候、右申入度如此御座候、以上

八月九日　　榎並長三郎

下郡徳三郎殿

追啓、本文之両人之者、兼而御軍用御用御□（手）当之者ニ候、以上

郷中ゟ松江江罷在居候百人もの、御小人、或ハ御家中奉公等ニ罷出候人別、身元江時勢を申立、江戸、京、大坂、長州行御供被仰付、又ハ此度出張罷出候ニ付両度入用金銀札、着類等相渡呉様、右ハ差急之儀、深切として漸歩行候者有之趣、不埒之事ニ候、万一右様之御用ニ而罷出候得者、其者へ其身先江可罷帰歟、其内若罷出節ハ、親類又ハ懇者之者を以往返可致、無左面躰不見分もの風意（不）ニ罷出候迚、決而被欺間敷旨、早々郡中人別江者郡役人共ゟ申聞、往来者改者不絶令廻村、増往来者改とも示合、右様悪者ハ早々召捕、可訴出候、以上

八月廿二日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

石炭掘人別諸郡探索之節、銘々別紙雛形之通、鑑札所持往来致し候由ニ候条、此段令承知、無差支相通可申候、以上

八月八日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

急申達候、

御出陣被仰出候ニ付而ハ諸郡御立山守共江夫役等相当候向茂有之哉ニ相聞候処、如何様之訳ニ候哉、既ニ天保之度、出雲郡新川御普請之節、夫役等儀者諸郡御立山守之分ハ除キニ相成居候振り合も有之、如何様之御心得ニ候哉、有無共御取調否、御申出可有之候、以上

八月廿三日　　松浦辰三郎

岡　賢蔵

下郡徳三郎殿

一、磯貝昇介、青柳与左衛門儀、為早駆当月十四日江戸表出立、唯今参着、同十三日御用番御老中牧野備前守殿ゟ御留守居御呼出しニ而罷出候処、松平大膳大夫様御追討被仰付候ニ付、此方様ニも陸地石州路之二之手被仰付候間、萩城を攻陥、夫ゟ山口迄馳向ひ、大膳大夫様御父子始誅戮可被致旨被仰出、【松平三河守様ニも御同様被仰付】候間、可被申含旨、有馬遠江守殿、松平佐渡守様、松【平】主計頭様援兵ニ被仰渡候間、得其意可申談候旨、且又長防両国江攻入候【口々】割合かた之儀者、別紙之通被仰出候間、是又可被申合由、尤当月中出陣之心得ニ而、【御】出張日限之儀ハ尾張前大納言様江可被相伺旨、御老中御連名之御奉書并別紙共以用人御渡被成候由ニ而持参、則別紙左之通、且又石州路ゟ攻寄候面々江将軍目附、御使番内藤弥左衛門殿、大嶋主殿殿、朝倉小源太殿被差遣候由も御達有之候

陸地芸州ゟ岩国、夫ゟ山口へ攻寄候面々

一番

【ヒロシマ】　松平安芸守
【マツヤマ】　板倉周防守
【マツシロ】　真田信濃守
【フクヤマ】　阿部主計頭

松平安芸守様応援之面々

【ミヨシ】　松平近江守
【カツヤマ】　三浦佐渡守

二番

【ビツチウニワセ】　板倉摂津守
【イセ　カンド】　本多肥後守
【ビゼン】　松平備前守
【タツノ】　脇坂淡路守

陸地石州ゟ萩、夫ゟ山口江攻寄御面々

一番

【イナバ】　松平相模守
【ハマダ】　松平右近将監
【ツハノ】　亀井隠岐守

二番

【ツヤマ】　松平三河守
【イヅモ】　松平出羽守

松平三河守様へ応援之面々

【エツゼンマルヲカ】　有馬遠江守
【ヒロセ】　松平佐渡守
【モリ】　松平主計頭

海路四国ゟ徳山、夫ゟ山口江攻寄御面々

一番

【トクシマ】　松平阿波守
【マツ山】　松平隠岐守

二番

【高松】　松平讃岐守
【ウハシマ】　伊達遠江守

松平讃岐守様へ応援

松平壱岐守

海路下之関、夫ゟ山口江攻寄御面々

一番　【クマモト】　細川越中守
小笠原大膳大夫儀者領分　【コクラ】　小笠原大膳大夫
近之儀、細川越中守、　【ヒセンナカツ】　奥平大膳大夫
奥平大膳大夫より　【小倉新田】　小笠原近江守
先達可相向候、　小笠原幸松丸
小笠原幸松丸儀ハ
小笠原大膳大夫与一手ニ相成
可相向候

二番　【チクセンフクヲカ】　松平美濃守
【ヒセンサカ】　松平肥前守

松平美濃守始応援
【ヒセンヒラド】　小笠原佐渡守

海路萩ゟ山口江攻寄面々

一番　【サツマ】　松平修理大夫
松平修理大夫へ応援
【シマバラ】　松平主殿頭

二番　【チクゴ】　有馬中務大輔
【ヒコヤナカハ】　立花飛騨守

右之通被仰出候間、陣中之儀ハ万事尾張大納言殿御指揮ニ随ひ、速ニ遂成功候様被仰出候

【八月廿六日】

一、従京都御飛脚到来、去ル廿日、御老中稲美濃守ゟ御留守居様御呼出しにて、左之通御書付を以御達有之候由申□候

御　名

長州御征伐御手配之儀ハ、当地十三日御書付相達候処、右ハ取消ニ致し、討手配之儀、松江表ニおゐて相達し候通可被心得候

□八月

右之通為御知有之候条得其意、郡中へハ郡役人ゟ御しらせ置候、以上

子八月廿六日　渡部文六

佐藤白蔵殿
田中庫七殿
郡三人宛

貴札忝致拝見候、秋冷弥御堅勝ニ被成御座、珍重奉存候、然者
此度
御出張ニ付、郷夫并ニ梅干、味噌、苅豆等、寺社領村々江割賦之儀、当郡振合御向合被遣、致承知候、然処当郡ハ社領之村々有之候得共、表領之通郷夫、梅干、味噌、苅豆等夫々致割賦候処、無差支差出候間、貴郡とても別段之儀ニハ御座有間敷候歟与奉存候、右之通内々返答為可申進、如此ニ御座候、以上

八月十七日　下郡本右衛門（出雲郡）

下郡徳三郎様

態与申上候、梅干、味噌之儀、追々申上候、一昨日御返答之場ニ而受高程ニ相都詰差出し度奉存候処、外郡ニても気取違ひ有之由ニ而、追々書出し直し等有之、郡々

速ニ相成受高程書出し与、或ハ受高ハ相増、又者相減り候様相成候而、甚以取都詰出来兼、込入申上候、何分松江ニ而示合候郡々人別手前取調、有高書出し与申場ニ而、郡□書出しも当郡江取集候筈ニ御座候へハ、いつれ速ニ書出しニ而有高ニ相都詰方可然奉存候ニ付、其郡之□□□□被仰下候受高之外ニ有之分与申分を、受高与一ツニメ、都合味噌拾四石六斗、梅十弐拾□万五千四百五十ニシテ書出し可仕候間、左様御承知可被下候、其内御差閊も御座候ハヽ、此ものへ少し為御知被下度奉頼候、右幸便ニ付差急大乱筆御免可被下候、以上

八月十七日　　為右衛門

佐六

徳三郎様

態与申遣候、早米両御蔵入之儀、先達而差紙遣し置候処、最早日限受合ら間合も無之候処、此時節柄之儀、急度御手当ニ相成居候間、村々御責立、急々御蔵入可有之候、為其以飛脚如此ニ御座候、以上

八月十八日　　三嶋泰八郎

原与三兵衛

佐藤官蔵

林大四郎

下郡徳三郎殿

海岸御手当御人数之儀ハ、委曲先達而詰置候処、急変之節御操出シ相成候迄之処、防方異船防御乗之□□被仰渡候通相心得、異変与見受候ハヽ直様人別駆集、如何様とも致し相防候様、且松江表江急左右之儀ハ申ニ不及、最寄農兵取立方江も致注進可申、其中ニハ御備操出しニ可相成候間、指揮ニ□ひ相働可申旨、浦方并ニ御境筋村々人別江不洩様可申渡候、以上

八月十□日　　渡部文六

郡三人宛

小泉右衛門、歩兵与頭御雇ひ被仰付、善兵衛組子之者其侭右衛門組ニ相成候由候条、為知申入候、以上

八月十三日　　渡部文六

郡三人宛

内田忠蔵出郷之節、他国旅人通行差留候様示合候ニ付、所々江□屋番申付置候由委曲伺出之趣申達候処、最早不残番為引候而可然□□候条、此段可令承知候、以上

八月廿日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

郡三人宛

明後十七日夕方八ツ時、乃木浜ニおゐて湯町沖を見懸、大炮試転有之候条、人船留差出、湖水江出間敷様、灘付村々江不漏様可申渡候、以上

八月十五日　　渡部文六

郡三人宛

河合文平儀、為早駆当月十四日京都出立、只今到着、去ル十三日御老中稲美濃守様ら御留守居御呼出しニ付罷出候処、御書附御渡し被成候由持参、左之通

御　　名

山陰道討手

一、一之先　　松平相模守

一、二　　亀井隠岐守

一、三　　松平左近将監
一、中軍　　松平出羽守
　　加賀中納言家老
一、後備　　長　大隅守
長州征伐被仰出候ニ付而ハ書面之通相心得、去月廿四日相達し、国許へ揃置候人数早々操出し、当月下旬ゟ来月十日を限り石見国江参、某差図相待可被申候、尤自彼妄動いたし候ハヽ不待差図攻入、誅伐可有之候、尤山陰道討手之面々相続可有之候人数多少ハ高ニ応し選兵、強卒差出、雑人ハ可成丈ケ相者可申候、且又大小船々兼而用意致し可置候
八月

一筆致啓上候、万一御遣高与申ニ相成候へハ、即刻金壱万両十郡へ御渡し被仰付旨先達而御頭書ヲ以被仰渡、則郡々割合其郡左之通
一、六千六百廿貫七文　　出雲
一、六千四百弐貫三百廿弐文　　楯縫
一、三千五百六貫弐百四拾四文　　秋鹿
右之通御座候、尤御渡し口之儀ハ御差図被仰付置度旨願出置候間、追而御差図ニ可相成与奉存候、右為可申進如此ニ候、恐惶謹言
　　八月十八日　　下郡為右衛門
　　下郡佐六
　　下郡徳三郎様
　　下郡源三郎様
　　下郡本右衛門様
大目付江

松平阿波守　　松平美濃守
松平三河守　　松平相模守
細川越中守　　有馬中務大輔
松平備前守　　松平出羽守
松平隠岐守　　立花飛騨守
松平安芸守　　松平修理大夫
松平右近将監　　伊達遠江守
松平肥前守　　亀井隠岐守
松平周防守　　小笠原大膳大夫
奥平大膳大夫　　阿部主計頭
脇坂淡路守
松平大膳大夫、兼而禁入京候処、陪臣福原越後ヲ以名者歎願ニ致し、其実強訴、国司信濃守、益田右衛門介等追々差遣候処、以寛大仁恕【雖扱之】誰彼之更ニ無悔悟之意、言を左右ニ寄、不容易之意趣ヲ含、既ニ自分兵端を開、対禁闕炮発候条、其罪不軽、加之父子黒印ニ軍令条授国司信濃守由全軍顕然候、旁防長ニ押寄、速追討可有之事
　　七月廿三日
右之通従
御所被仰出候ニ付、御追討有之候間、速ニ軍勢国許へ相揃置、差図相待可被申候、尤従彼妄動致し候ハヽ、不待差図口々ゟ撃入、誅滅可被致候
　但、寄手之攻口并ニ攻懸り候日限ハ、御決次第可相達事
右之通前書之面々於京都相達候間、此旨可相心得旨此外万石以上以下之面々へ可相達候
　　七月
右之趣、従

公儀被仰出候間、可存此旨由
御意候、此段郷中相触候様郡奉行中へ可申渡候、以上
八月十九日　赤木文左衛門
大野舎人
大橋筑後
三谷権大夫
今村修礼
朝日千助
有沢能登
高橋紋右衛門殿
小田佐一兵衛殿
富谷門蔵殿
右書　富谷門蔵
小田佐一兵衛
高橋紋右衛門
渡部文六殿
右書
八月十九日　渡部文六
四郡下郡当テ
従江戸御飛脚到来、去ル五日、御用番御老中牧野備前守殿、御留守居御呼出ニ付罷
出候処、左之通御達有之由申来
御　名
松平大膳大夫家来共、兵器ヲ以奉劫　朝廷、不届至極ニ付、追討之儀ハ兼而被仰付
置候処、今度惣都督之儀、紀伊中納言殿ニ被仰付、副将之儀ハ松平越前守殿へ被仰
付候間、万事中納言殿御差揮ニ随ひ、格別ニ抽忠勤、速戦滅致し候様被仰出候
長州江外夷渡来之風聞有之候処、浦方へ参り、薪水を乞候儀可有之も難斗候処、万
一右様之儀有之候ハヽ、元来
帝国へ襲来候船之儀、決而薪水等遣候而ハ不相成、幾重にも及断、若彼ら事を起候
ハヽ、打払候而不苦由、尤軽率之儀無之様可取斗旨ニ候条、此段令承知、人別共江不
洩様早々可申渡候、以上
八月十九日　渡部文六
佐藤白蔵殿
郡三人当テ
長防両国之商船浦々へ入津之節、取扱方之儀、嶋根郡ら伺進申達し候処、風相訴懸
等ニ而湊入は無余儀次第ニ候間、致入津候ハヽ、直様湊役人共船中江乗組相改、別状
無之候ハヽ、滞船中之薪外食料ハ任望遣し、万一商用等ニ而無余儀上陸致シ候□も有
之候ハヽ、其処切り、尚又厳重ニ心を附可申、若船中怪敷見込も有之候ハヽ、早々出
帆申付、落人等乗組居候ハヽ、直ニ往来者改、御番人抔ニ相訴、其段届出候様可申談
旨ニ候条、此段相心得候様申渡へく候、以上
八月十四日　渡部文六
佐藤白蔵殿
下郡徳三郎殿
与頭愛右衛門殿
与頭与九郎殿
御操出し□節ハ、下卒減し之儀、昨日申入候、右ハ下地之侭ニ而心得可被成候旨□

候間、右御談書ハ消しニ致、御序ニ御返し可被成候、以上

八月十八日　　四人

下郡徳三郎様

一筆致啓上候、操出候節罷出候郷夫、左之通り木札ニ村名相認メ、首ニ懸可罷出旨、天保之度被仰渡置候処、年数相立候事ニ付、為念申進候間、以来とも御議定之通御取斗可被成候、以上

八月十八日　　野津民三
田中周助
渡部専重
渡部喜重

郡三人当テ

御国内御手当塩払底、殊ニ長州路塩浜通船不相成趣ニ付、御国へ入来候塩ハ可成丈ケ取入候様、勿論入津之塩ハ不持出候様可申談旨ニ候条、此段令承知可申渡候、以上

八月廿日　　渡部文六

郡三人当テ

此度御操出しニ付而、御手当金御渡被下候内ニ、郷夫壱人ニ弐歩ツヽ小遣銭御渡被下度旨、嶋根郡ゟ伺出、承知届ケ候、金子ハ追而受取、可相渡候間、其節ニ至り人別へ配当可遣候、以上

八月廿日　　渡部文六

郡三人当テ

覚

本参御小人壱人

右御入用ニ付、其郡へ令割賦候条、歳・丈ケ・男振等例之通り相撰、急々自分方へ差寄を以御小人方へ可差出候、以上

八月廿五日　　渡部文六

郡三人当テ

浦々諸廻舟他国出入訴、是迄ハ一ヶ月分束而翌月差出候処、以来□(其)都度ニ可訴出旨ニ候条、此段令承知、浦々へ無間違訴出候様可申付置候、以上

八月廿八日　　渡部文六

郡三人当テ

十郡農兵当時出高并名前付、年齢等取調、至極急々可差出旨ニ候条、其郡之分早々取調、片時も急々可差出候、為其飛脚を以申入候、以上

九月朔日　　渡部文六

郡三人当テ

出張農兵へ出張中一分宛差免、脇差壱腰、鉄炮壱挺宛御渡被成遣候旨ニ付、追而受取相渡候条、此段令承知、農兵共へも為知置候、以上

九月朔日　　渡部文六

郡三人当テ

郷中之者、他国罷出相稼候儀ハ、前々ゟ御停止之事ニ付、是迄も殿り合筋追々厳重被仰渡候処、近来他国稼別而盛ニ相成候趣ニ相聞候、畢竟他国ハ賃銭も宜敷、夫ゟして欲ニみとれ心懸候事与相聞候処、当節柄数多之人夫御手当之央、与風右之内ニハ夫役申付置候もの可有之も難斗、左候而ハ急場ニ臨ミ差閊ニも可相成、台躰右様之は村役人始組合之者共ゟ精々可心付候筈之処、等閑ニ差置候より右之次第、甚た不埒之事ニ候、此後決而心得違ひ不致様改而厳重申渡、尚往来者改郡役人なと不絶可致面見候旨ニ候条、此段令承知、人別へ不洩様能々申渡、急度殿り合行届候様可取斗候、以上

八月十四日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

追加、此節ゟ村柄ゟ婦女例年伯州へ綿もりニ罷出候趣ニ相聞候処、右者大概日数限りも有之、他国ニ而養ひニ預り候上、不少金銭取入候事与相聞候間、先ツ是迄□ニ被差□置候旨ニ候、乍尓男女弁別いたし申渡候も難出来、右等之処ハ其方とも切内々差含可取斗候、以上

此度　御出張ニ而鰐淵寺へ夫米、梅干、大豆、苅豆等申付候処、寺院江も御国役ニ而右之通り軍役割付候事哉之旨、寺社御奉行所ゟ問合有之候処、如何様之次第ニ候哉否之趣、至極急々御申出可被成候、以上

八月十四日　　四人

郡三人当テ

高橋彦兵衛儀、拾人扶持被下置、郡奉行農兵御用懸り、南四郡支配下ニ被仰付旨ニ候条、為知申入候、以上

八月十一日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

原猪太郎殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

追加、郡足軽ハ、是迄之通りニ候条、左様可相心得候、以上

此度長防両州御征伐被為蒙仰候ニ付、御武運長久、国家安全ため、杵築大社ニおゐて御初穂千弐百貫文相備、御祈祷仕度旨委曲伺出候趣申達候処、御聞届之旨ニ候条、此段令承知、可取斗候、以上

八月六日　　渡部文六

村田幾右衛門

十郡下郡当テ

猪目浦船乗共長州江罷越候節、売買、昨年其外之様子共相知れ候ハヽ、不限何等ニ見分次第申出候様可申付旨ニ候条、此段令承知、能々可申付置候、以上

八月八日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭与九郎殿

楯縫郡

下郡新四郎殿

御操出之節、入用郷夫松江ニ而之焚出し宿、先年為知申入置候処、此度相増候ヶ所

も有之、改而左之通り

集りヶ所

堂形揃

焚出し宿

末次町

伊野屋甚五右衛門

与頭、庄屋、三拾八人

郷夫百四拾八人

同町

伊野屋為三郎

百九拾人

同町

杉谷屋民助

百五拾人

同町

伊野屋友助

百九拾人

〆七百拾六人

右之通御議定之旨ニ候条、郡中村浦人別不洩様為知可置候、以上

八月廿八日　　渡部文六

郡三人当テ

武文（ママ）館望諸稽古場御入用樫・竹、先達而割賦被入申置候処、右ハ急御入用之由ニ候間、至極急々附来候様御申談可被成候、以上

八月晦日　　野津武三

田中周助

渡部専重

渡部喜重

下郡徳三郎様

態々申入候、御蔵入米之儀ニ付度々及御懸合ニ候得共、今以運送も不致、先日も何日ゟ運送いたし候様各方見積之場を以御返答有之様飛脚を以申入候処、何之御返答も無之、如何様之訳ニ候哉、先日申入候通り当時柄新米御急手御入用ニ付、於月支蔵ニも御差閊ニ相成候間、此書状相達し候ハヽ早々運送いたし候様厳敷御申付可有之候、些延引ニ相成候□□（而者）各方ニも不相済儀ニ候条、為其又々飛脚を以如此ニ候、以上

九月十四日　　三嶋泰八郎

原与三兵衛

佐藤官蔵

林大四郎

下郡徳三郎殿

一筆致啓上候、村々ニ而松明、草鞋、馬沓等潤沢ニ貯置候儀ハ、貴様方ゟ御用拵ハ無之趣ニ候得共、因州様、津山様御通行ニ相成候ヘハ就中太層御入用ニ可有之、成丈ケ余分貯置不申而ハ時ニ臨ミ御差閊ニ候間、尚又村々ニ而余分相当置候様能々御申付可被成、此段可申進旨ニ候ニ付、如此御座候

九月五日　　野津武三

田中周助

渡部専重

渡部喜重

郡三人当テ

覚

当分御抱入本参御小人

拾五人　内弐人

右、郷中へ飛脚引当テ、御小人御抱入之儀ハ、当年中先拾五人、旅詰無之ニメ御抱御議定ニ候間、急々手配方可致旨、尤上給銭ハ賄旅入用抔引当り、もの入ニも可有之候間、此度ハ別段之場を以成丈ケ郡償減候様取斗可申旨ニ付、則十郡へ令割賦、其郡割賦別如此ニ候条、早々自分方差紙を以急々差出候様可申付候、以上

九月六日　渡部文六

郡三人当テ

此度京都大火ニ付、京・大坂とも木綿□（不）景気、直段も大ニ下落いたし、市場売立方差閊ニ候間、増駄別上納之儀御猶予被下度旨、願之趣申達候処、無余儀訳ニ付、追而上方木綿売買融通致し候迄増駄取立之儀御猶予被成遣旨ニ候条、此段令承知、村々へも為知可置候、以上

九月四日　渡部文六

郡三人当テ

一筆致啓達候、秋冷ニ御座候処、弥御堅□ニ被成御勤役、珍重奉存候、然ハ先達而日御崎御祈祷御案内申進候得共、御越不被遊、残多ニ奉存候、右ニ付御祈祷料も為持不被遊、無拠当郡5取替相備置候間、別紙受取書之通り此ものへ御渡し可被遣候、右御示合為可得御意、如此ニ御座候、恐惶謹言

九月五日　下郡為右衛門

下郡佐六

下郡徳三郎様

追啓、此度日御崎御玉串ハ、与頭善右衛門儀為持参遣行いたし候間、左様御承知可被遊候、尚又先達而杵築御祈祷之節、諸郡へ相廻し候飛脚四人并御玉串両所分為持、差出し候飛脚賃共壱貫文宛此ものへ御渡し可被遣候、以上

此度京都大火ニ付、京坂とも木綿不景気、直段も大ニ下落致、市場売方差閊候間、増駄銭上納之儀御猶予被成下度旨、願之趣申達候処、無余儀訳ニ付、追々上方木綿売買融通り致候迄、増駄別取立之儀御猶予被成遣候旨ニ候条、此段令承知、村々へも為知可置候、以上

九月四日　渡部文六

郡三人当テ

御操出之節、松江へ罷出人夫兵粮并馬飼料とも其日丈ケ之分ハ銘々持出し候様、左候へハ御出陣ニ相成候日迄之兵粮者、町方飼葉ハ御厩より手配方御議定□□、扨又他国へ押出し候而ハ、馬飼料・苅豆等ハ荷重之儀ニ付、大豆或ハ米類付合候様可申談旨ニ候条、此段令承知候、以上

九月八日　渡部文六

郡三人当テ

御目附遠乗之節、平田町御茶屋御貸被成旨御議定ニ候条、為知申入候、以上

九月七日　渡部文六

郡三人当テ

御台場御筒御据付ニ相成居候処、御場所内へ見物人入込、踏荒し、雨覆等取外ヶ所も有之趣ニ付、壱人宛番人被仰付、日々心を付、且御台場地草生茂り不申様不絶草苅取候様相成度由ニ候処、如何様之もの哉、右様相成候得者、番人江心附□（等）不被下而ハ相成間敷候、年中壱人江何程位被遣候而可然もの哉、且番人□人別とも急々可

申出候、以上

附紙、川下弐ヶ所

古津壱ヶ所

九月十二日　　渡部文六

郡三人当テ

此度御操出し候節、入用郷夫村々ニ而鬮取等を以相定メ候事与相聞候処、間ニハ一ツ手間ニ而、出夫相当り跡、家内養育等差問候向も有之哉ニ相聞候処、陣中夫役留主式之儀、郡村ニおゐて主法相立、跡ニ差問無之様仕向可遣ハ勿論之儀与被存候へハ、其辺等閑ニハ差置間敷候得共、難渋之小百姓とも右等之節安心為致置不申候而ハ、時ニ臨ミ出夫之支にも可相成哉ニ付、左之通り

一、無田極貧者跡、家内・老人、又ハ子供持ニ而、今日之営ニも差問候様之もの江ハ、飢扶持准し、上ゟも御仕向被成遣候得共、左候迚無際限上江もたれ候而ハ不相済候条、可成丈ケ親類、村役人、頭分抔申合、留主中養育之道懇ニ相仕向遣し、弥以不行届候向ハ伺出可申事

一、懸り作場等所持罷在候もの、留守中ハ他より幾重ニも助ケ遣し申事ハ出来、秋ニハ苅上ケゟ干守護こなし、且ハ畑物仕付かたく等、惣而作かた世話拵之儀、是又親類、村役人、頭分抔申合、懇ニ取斗可遣事

一、飼立居候牛馬も有之候ハヽ、留守中懸行之儀ハ、御所ヶ条ニ准し、実意ニ相仕向可遣事

右之外不限何等ニ出夫之もの跡江心残候而ハ進退不軽、自由陣中与支共可相成候条、与頭共ハ不絶令順村、郡中之惣躰を推量、万事可加親切候、勿論耕作之儀ハ出夫ニ付而荒所等出来候而ハ不相済事ニ候条、呉々も助合、一入令出精候様打込、可令心配候、以上

子九月十九日　　渡部文六

郡三人当テ

一筆致啓上候、御厩御入用苅豆、当春割賦被申入置候処、此度受負人乃木村半左衛門儀、来ル廿五日平田町是迄之津端ニおゐて受取度旨申出候、もし同日雨天ニ候ハヽ、翌日ニ差延し可申旨申出候間、此段御承知、村々江為御知置可被成候、以上

九月十一日　　四人

徳三郎様

愛右衛門様

与九郎様

此度西方出張御引上ニ相成候処、右ニ付与風気ゆるみ候様之儀有之候而ハ、不相成候、就中御番所〳〵殿合等者別而厳重相守候様急度可申談旨ニ候条、此段令承知、猥之儀無之様可心付候、以上

九月十四日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

田中庫七殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

当節柄之儀ニ付、三十石以上之船御手当ニも相成候間、成丈ケ他国ニ逗留不致、売事済次第早々帰帆致候様、浦役人共ゟ懇ニ申諭し候様可申談旨ニ候条、此段令承知、可申渡置候、以上

九月十八日　　渡部文六

郡三人当テ

農兵一刀帯候之儀ハ、致出張居もの斗り、出張中被成御免、番脇差被相渡、尤自分拵ひ指候ものハ勝手次第、依而農兵共何方ニ何人出張致し候内、何人ハ自分ニ拵ひ、何人ハ番脇差拝借与申儀、取立方より取調、可差出候旨御談ニ相成候由ニ候条、為知申入候、以上

九月十五日　　渡部文六

郡三人当テ

浦々諸廻舟出入願度々訴出候様先月廿八日申談置候得共、是迄之通り一ヶ月分束而、翌月差出候而可然様ニ候条令承知、浦々へも為知置候、以上

九月廿日　　渡部文六

郡三人当テ

覚

焼竹百八拾壱本

右文武館より

若殿様御稽古并御次廻り稽古増御入用焼竹四百本、諸稽古場増御入用同千六百三拾本、〆弐千三十本、十郡令割賦、其郡割賦前如此ニ候条、早々致伐採、堂形永原勇之助、永原源六方へ付来候様可令手配候、以上

九月十八日　　渡部文六

郡三人当テ

覚

大豆むしり葉

九百拾五貫七百六拾八匁

右、子所務御厩御入用九千貫目、郡々へ割賦可申渡談旨ニ付、仁多、飯石両郡除外、八郡江令割賦、其郡之分前書之通ニ候条、成丈ケ宜敷分苅豆払方左之通津端ニ而払人江直渡令払方候様可申付候、以上

九月廿二日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

津川六郎右衛門儀、急御用ニ付、明廿九日朝六ツ時出立、同夜平田町泊ニ而、翌晦日神門郡鷺浦迄罷越候条、平田町ニ而宿壱軒手配可申付候、以上

九月廿八日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

其郡農兵共此節苅揚、麦蒔、追々農業繁多ニ相成候ニ付、農事透間ニ相成候迄稽古見合候様、其外口屋固台場江相詰居候農兵・山猟師とも、一先ツ引払被仰付旨候間□□□□趣農兵江立役抔へハ御軍用方6申談ニ相成候筈ニ候条、左様相心得可取斗候、以上

九月晦日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

【挿入状1】

（端裏書）「御触書之写し」

亜米利加ニ合ミ（ママ）衆国より差出候書翰之儀ニ付、夫々致建議候趣、遂熟覧、集議参考之上、達御聴候処、諸説異同ハ有之候へ共、詰り和戦之二字ニ帰宿いたし候、然処面々被致建議候通り、当時近海を初、防禦筋未御全備ニ不相成候ニ付、渠カ立置候書翰之通弥来年致渡来候とも、御聞届之有無ハ不申聞候、可成丈ケ此方ら ハ平穏ニ為取斗可申候へ共、彼ら及乱防候儀有之間敷共雖申、其節ニ至り、不覚悟有之候而ハ

御国辱ニも相成候儀ニ付、御禦之筋、実用之御備精々心懸候面々忠憤を忍ひ、義勇を蓄ひ、彼之動静を致熟究内、万一彼より兵端を相開候ハ、、一同奮発、毫髪も御国躰を不汚様上下挙而心力を尽し、忠勤可相励との

上意ニ候

右之通、従

公儀被　仰出候間、可存此旨由　御上意ニ候、此段郷中相触候様郡奉行中へ可被申渡候、以上

十一月十四日　　乙部九郎兵衛

大橋茂右衛門

三谷権太夫

大野舎人

大塚久太夫殿

高橋紋右衛門殿

樋野弥次兵衛殿

【挿入状2】

（端裏書）「嘉永五子年

極内々平安要用」

別紙御内々ニ而申上候、近来各方頭分手前、大分不如意ニ相成候抔与悪説のミ噂仕候甚無心元時節ニ相成、扨々世間も等閑ニ通行不相成候様成行候処、是とても弥張人の事ニ而者無之候間、御互ニ万事気を付、年を送り度奉存候、神門辺ニ而も金高之田畑仕出し、大分出来候様子ニ御座候、誠ニ当時者おそろしき時節ニ御座候、右御心得之ためニも可相成与奉存候ニ付、乍御内分世間向少し為御知申上候、御一覧之上御火中可被下候、以上

十一月廿五日　　大順

飯嶋さま

農兵取立方入用御貸人人足飛脚賃等之儀、飯石郡ら伺出、申達候処、御貸人賃銭之儀者、西方出張先取扱之見合を以、一日壱人弐百四拾文宛、上下半分割、其外人足飛脚とも御法賃銭郡役人共仕出し手形を以受取相渡候様、尤右御貸人賃共下タら償候分ハ十郡割ニ可申付旨ニ候条、此段令承知、可取斗候、以上

十月二日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

別紙を以得御意候、長州御追討一条ニ付而、先達而、本右衛門様御太儀ニ而御出府被成、其節ハ何角段々御苦労様ニ相成、別而忝仕合ニ奉存候、且右一条も追々穏ニ相成、当時之成行ニ而ハ御延引ニ相成候事歟と奉察候、御国民悦無限御同然、奉大悦候事ニ御座候、将又西方御出張も追々御引上ケニ相成候様承候処、いつれ此度之一条ニ付而ハ種々之取行都詰方、諸郡示合、一同之取扱ニ相成不申儀も数々可有御座候処、郡割取調時節ニいたる書面被往返ニ而ハ示合詰兼可申、伺遣（進）申候而も諸郡区々ニ相成候而ハ御差図ニ御六ヶ敷可有御座候へハ、急々諸郡立毛礼出府も御座候間、其節日限取極メ、一緒出府仕候、何角御示合、取斗候而ハ如何可有御座候哉、

いまた立毛礼出府之節ハ、右之相談出来間敷御座候哉、もし一緒ニ立毛礼出府致し、示合可然与思召候ハヽ、被仰合、諸郡御示合、書状御仕出し被下度奉存候否、此もの へ思召御報被仰付度奉願上候、以上

九月廿五日　　嘉一兵衛

徳三郎様

本右衛門様

覚

一、　生雑小割八千九百貫目

　　生松大割八千九百貫目

右、薪方より来丑年

御殿方御入用高拾万貫め宛之内、十郡へ令割賦、其郡割賦別紙如此ニ候処、来月中ニ附来候様可令手配候、以上

子九月廿五日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

追加、生木ニ而取〆干立候間合も有之候ニ付、期月之通無間違令運送候様、可令手配候、以上

覚

大豆むしり葉

弐百七拾□貫八百六拾六匁

右、御厩御入用苅豆、神門郡割賦前申談置候処、当六月水損、尚又出張之面々馬飼料ニ差出候ニ付而ハ、飼葉不足致し、其外此先御出陣又ハ出張、尚又健様抔ゟ御頼も有之ニ付申達候処、神門郡受高之内、むしり葉弐千貫の外郡□□（々へカ）割賦可致旨ニ付、同郡并仁多・飯石郡両郡相除、其余七郡へ令割賦、其郡之分如此ニ候条、早々村々へ令割賦、御厩へ令払方候様可令手配候、以上

十月十□日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

覚

一、馬草千三百三拾五貫目

右御操出之節

津山様御入用秣壱万五千貫目手当テ可置旨ニ付、十郡へ令割賦、其郡之分如此ニ候条、此段令承知、早々手合置、其段可届出候、左候得ハ運送口之儀ハ追而可申入候、以上

十月十八日　　渡部文六

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿

郡々船持或ハ船乗、又ハ町場商人共、国々津々浦々ニおゐて売事取組、積帰候諸品之内、間ニハ唐物抔も有之趣ニ而、郷中立廻り候哉ニ相聞候処、唐物売買之儀ハ兼而御作法も有之儀ニ候へハ、弥以厳重相守、不正之売事ハ勿論、聊も紛敷品々取入儀決而不相成候、仮令於他国ニも右様之売事ニ携候儀、堅く致間敷候、右之趣改而申渡候間、万一相背候族於有之ニ者、如何躰御咎可被仰付も難斗候条、前文之趣郡

中人別不洩様早々可申触、尚又其方共無油断心を付、別而往来者改ハ不絶順村、もし左様之者及見聞候ハヽ、早々召捕、可訴出候、以上

十月八日　　渡部文六

佐藤白蔵殿

下郡徳三郎殿

与頭愛右衛門殿

与頭与九郎殿